



あいかんきょう



2009/04/20
会報・第99号



枝垂れ桜

提供：中日本ハイウェイ・エンジニアリング名古屋(株)
伊藤 潔氏

撮影日：H21.3.29

撮影地：三重県いなべ市西貝野

昨年は暖冬で花が半分ほどと少なかったようですが、今年は見事な咲きっぷりとなりました。青い麦畑の片隅で眠る庄屋さんのお墓を守っている静かな山里の春景色です。

四季折々

最近、テレビを観ていても、家電量販店に行ってもよく聞く言葉「地デジ」。二〇一一年の七月二十四日をもって現在のアナログ放送は終了し、すべて地上デジタル放送に切り替わる▼電波の整理整頓をするのが地上デジタル放送移行への大きな目的ではあるが、現在の地デジ普及率はまだ半数程度らしい。この厳しい経済状況の影響なのだろう▼しかし、低迷した経済へのカンフル剤としての期待は大であり、政府は追加景気対策として、地デジ対応テレビの買い替えに、購入額の最大13%を次回の製品購入にあてることのできる「エコポイント」を与えるとした。また、専用チューナーの購入に対し五千円を上限に補助する制度の導入を決めた地方自治体もでてきている▼ちなみに我家にはテレビが三台あり、すべて画面の右上に「アナログ」という表示が出ている。つまり「地デジ対策が未だだよ」と云われているように気にはなっている▼我家の地デジ対応計画は、国や地方自治の今後の対応も気になるところであり、懐具合と相談しながら徐々に徐々にが最良策のようだ。

第二十六回通常総会開催

第二十六回通常総会が三月二十四日(火)午後二時から中京大学文化市民会館で、愛知県環境部環境政策課林主幹様、愛知県産業労働部商業流通課計量センター小関主幹様のご臨席を賜り開催されました。



総会では、平成二十年度事業中間報告、平成二十一年度事業計画及び収支予算、公益

法人制度改革に伴う一般社団法人への移行について、当協会の平成二十一・二十二年度役員選出についての議案が審議され全て承認されました。席上、測定分析に係わる地球温暖化防止喚起標語募集事業の入選発表があり、(社)東海技術センターの皆川正三様が表彰されました。



(社)愛知県環境測定分析協会役員名簿 (平成二十一年度～平成二十二年度)

会長	濱地 光男 (社)ユニケミー
副会長	大場 和子 (株)東海分析化学研究所
副会長	阪野 二郎 (財)東海技術センター
副会長	宇野 孝 (株)テクノ中部
理事	大野 哲 (株)イズミテック
理事	金田 哲夫 (株)環境公害センター
理事	鎌田 務 (株)愛研
理事	佐野 教信 壽化工機(株)
理事	柴田 金作 藤吉工業(株)
理事	豊田 豪 (株)アイエンス
理事	西脇 光正 (社)愛知県薬剤師会
理事	山本 英治 (株)ユニチカ環境技術センター
理事	稲垣 慎二 愛知工業大学
監事	渡辺 敏紀 (株)環境科学研究所

理事は五十音順

平成20年度 測定分析に係わる地球温暖化防止喚起標語入選者一覧

	標 語	所 属	氏 名
入選	計量も ムダムラなくして 省エネで	(財)東海技術センター	皆川 正三
佳作	地球への処方箋 守る仕事の 環境分析	(株)大同分析リサーチ	阿部 照代
佳作	環境分析 地球を計る 健康診断	(株)イズミテック	加藤 敦久
佳作	みんなで削減 二酸化炭素 地球を守る 環境分析	藤吉工業(株)	川井久美子
佳作	温暖化STOP 知恵を生み出す 環境分析	(株)大同分析リサーチ	河合 美幸
佳作	むだなく やさしく エコ分析!	(財)東海技術センター	栗田 裕子
佳作	正確な計量は循環社会の第一歩	藤吉工業(株)	中山 隆
佳作	温暖化を数値で示す環境分析	(株)東海分析化学研究所	夏目 訓良
佳作	無駄づかい みんなでなくそう 地球のために	藤吉工業(株)	日置 静治
佳作	温暖化 防止の為に まず測定	東亜環境サービス(株)	細井 幹展
佳作	見逃すな 数値変化は 環境変化	藤吉工業(株)	宮田 康子

佳作は五十音順

ISO/IEC 17025を学ぶ

第3回講座の開催

講師 (株)環境科学研究所 牧原 大

十二月三日(水)に中京大
学市民会館において参加者十
八名にて開催しました。

1 不確かさの概要

—概念としての誤差—

従来、測定の際のばらつきを表
現する方法としては「誤差」
という概念が使用されてきた。
しかし、「誤差」とは測定結
果と真値との差であり、実際
の問題として「真の値」は誰
にもわからない(神のみぞ知
る)ため、概念としての誤差
は存在するが、実際に誤差を
計算することは不可能であっ
た。そこで近年「誤差」に代
わって登場したのが「不確か
さ」という考え方である。

—不確かさの登場—

一九九三年に『Guide to
the expression of Uncertain-
ty in Measurement』(計測
における不確かさの表現のガ
イド)通称GUMと呼ばれる
文書がISO等7つの国際機
関の連名で提案され、「不確
かさ」という言葉が一般に広
まることとなった。GUMで
は、不確かさは標準偏差とい
う形で示され、測定結果の信
頼の程度を表すものとしてい
るが、実際の求め方について
は、その手順が示されている
だけであり、具体的な部分は
ほとんど測定者の側に委ねら
れている。物理測定を含め多
くの測定を対象としている以
上、これは仕方のないことで
あるが、それによって現場で
は少なからぬ混乱が生じてい
ることもまた事実である。な
お、この文書は二〇〇八年に
は第一版の改訂版(一九九五
年)がISO/IEC Gu
ide 98となり、さらに、
現在、JIS化が検討されて
いる。

—ISO 17025の中の不
確かさ—

ISO 17025では5章
に不確かさを求める手順を定
めることが要求されている。

「5・4・6 測定の不確か
さの推定 5・4・6・2 試験
所は、測定の不確かさを推定
する手順を持ち、適用するこ
と。(中略) 合理的な推定は
(中略) 例えば、以前の経験
又は妥当性確認のデータを活
用したものであること。」

2 不確かさ評価の基礎

—表記の方法—

不確かさは標準偏差で表し、
それを「標準不確かさ」と呼
ぶ。これは通常、各ばらつき
要因の不確かさを示す。さら
にそれを各要因の値で除した
ものを「相対標準不確かさ」
と呼ぶ。「標準不確かさ」を
合成して得られる全体の不確
かさを「合成標準不確かさ」
と呼び、それに包含係数を乗
じたものを「拡張不確かさ」
と呼ぶ。これが最終的に不確
かさとして用いられる。

—評価の方法—

GUMではAタイプとBタ
イプの評価方法が示されてい
る。Aタイプとは、統計的方
法により、評価する方法であ
り、実験等によって得られた

データを統計解析して求める
方法である。Bタイプとは、
メーカーの保証値、仕様、性
能データ等を標準偏差に相当
する量に変換して評価する方
法である。

—不確かさの合成—

不確かさの基礎として重要
なのが、不確かさの伝播則で
ある。これは、計算方法とし
てはこれまでの偶然誤差の伝
播則と同じと考えてよい。つ
まり、濃度の計算式が和と差
の組み合わせから成り立って
いる場合、計算式全体の標準
不確かさの自乗は、それぞれ
の要因の標準不確かさの自乗
の和に等しい。なお、濃度の
計算式が乗除式である場合は、
同様の計算を相対標準不確か
さを用いて行えばよい。

3 不確かさ評価の手順

(1) 測定の手順を明確にする。
不確かさ要因を抽出するた
めに、測定の手順、測定量の
定義を明確にする。測定の数
学モデル(計算式)を確認する。
(2) 測定のばらつき要因を
挙げる。

濃度を算出する式を利用し
て各要因の一覧表を作成し、
各要因の関係を特性要因図に
して、各工程における不確か
さ要因を漏れなく抽出する。

(3) 各要因の標準不確か
さを評価する。

・繰返し測定等のデータ→A
タイプ
・純度、器差等のデータ→B
タイプ
・機器仕様書等のデータ→B
タイプ

—不確かさの伝播則—

(4) 合成標準不確かさの算出
① 不確かさの伝播則を用いて
求める方法
② スプレッドシートを用いて
計算する方法

スプレッドシートはGUM
には登場しないが、覚えてお
くと非常に便利な方法である。
この方法の利点は、乗除式に
和や差が組み合わされている
ような計算式にも対応できる
ことである。

(5) 拡張不確かさの算出

不確かさの伝播則、又はス
プレッドシートから算出した
合成標準不確かさには、包含
係数kを乗じて拡張不確かさ
として表わす。通常はk=2
とし、95%の信頼率の幅を示
す。それを測定結果に付して
表記するとよい。

※実測データによる不確かさ
の値の評価

各要因から算出した合成標
準不確かさは、一連の分析操
作の繰返し測定から求めた分

析値の標準偏差と比較し、妥当性を検証する必要がある。両者に大きな差がある場合、重要な要因の見落とし「や」要因の交絡(ダブルカウント)等が考えられるため、再度検討を行う。

(6) パジエットシートの作成算出した不確かさは、要因ごとに不確かさをまとめたパジエットシートの形で整理しておく。

4 試験報告書の中の不確かさ

ISO/IEC17025 (JIS Q 17025) の要求事項「5・10・3・1試験結果の解釈のために必要な場合、試験報告書は次の事項を含むこと。

(C) 適応可能な場合、推定された測定の不確かさに関する表明。試験報告書の中の不確かさに関する情報は、試験結果の有効性又は利用に関係する場合、顧客の指示によって要求される場合、若しくは不確かさが仕様の限界への適合性に影響する場合に必要とされる。

校正証明書とは異なり、不確かさの記載は適用可能な場合に限る。ただし、必要な推定を行っていることは求めら

れているので、顧客から求められた場合は合理的な根拠に基づいた不確かさを提示できなければならない。

なお、グループ討議で出題された分析法の特性要因図の回答は、日環協より発行された「環境分析における不確かさの評価に関する報告書」(平成十七年五月)にすべて記載されており、ご参照ください。



・講座を受講して・

(株)環境科学研究所

濃度分析課 岩田 茂

当社はISO9001と14001の認証を取得しているほか、上水においては水道GLP、そして一部の分析項目でISO/IEC17025の認定を受けている。

私自身は、分析検査員としてISO9001、1400

1に携わってきたが、ISO/IEC17025については、これまで総合的に学ぶ機会がなかった。特に今回テーマとなっている「不確かさ」は分析業務の中で精度管理の根本となる部分であるにもかかわらず、規格にはその具体的な求め方が記載されていないため、日頃から困惑する場面が多かった。そのようなことから、今回の第三回目は、非常に楽しみにしていた講座であった。

講座は不確かさの概要、評価の基礎、評価の手順の順に行われた。

【概要について】 GUMを元とする国際機関の動向や不確かさの導入に至った経緯等を、不確かさと誤差を比較しながら解説されており、違いが明確に理解出来た。特に「不確かさは基本的に複数の要素からなる」という説明は、誤差との実用上の相違点をよくイメージできた。またGUMにJIS化の動きがある事は今回初めて知る情報であった。

【評価の基礎について】 各要因の不確かさの評価方法としての統計的方法(Aタイプ)と、それ以外の計量学

的方法(Bタイプ)の各パターンごとの計算方法を中心に講義を受けた。特にAタイプの求め方では新たに何かをやるのではなく、普段からの精度管理活動の積み重ねが大切であることを学び、日頃の自社の精度管理について見直す良ききっかけとなった。

【評価の手順について】

ばらつき要因の抽出と特性要因図の作成が重要である事、またAタイプ、Bタイプを活用しながら、最終的に拡張不確かさの算出にもっていくプロセスを実例を挙げて解説され、参考になった。特に「スプレッドシート」はあらゆる

パターンの濃度計算式について、その不確かさを合成することが出来る便利なツールでありGUMの学習だけでは得られないものであった。早速試してみようと思う。その他、不確かさ成分のまとめ方(パジエットシート)、活用方法(比較検討)等の解説もあり、実に実用的な内容ですぐに実践に活かそうである。

【グループ討議】

グループ討議はテーマとして特性要因図の作成を取り上げた。特性要因図の作成は、不確かさ要因の抽出時に欠か

せない重要な作業であり、認定審査にてよく指摘されるポイントとのこと。ひとつの分析方法を掘り下げて他社の方と意見交換ができ、大変参考になった。また、分析方法をどれだけ理解出来ているかが重要である事を改めて認識した。今回の講座は、短い時間の中で不確かさという概念を、導入経緯から求め方まで通して学ぶことが出来た。今まで漠然としていた不確かさというものの輪郭がはっきりし、ISO/IEC17025の中で何を要求されているかが見えてきたように思える。特に今回の講座の「迷ったときにはこうする」的な部分は今後大いに参考となりそうである。今回得られたものを活かして、さらなる認定項目の増加に向けて努めていきたいと思う。



委員会活動報告

総務委員会

委員長 阪野 二郎

第五回委員会を二月三日に開催しました。

一、喚起標語の選考

応募二百四作品十五社（昨年度百三十九作品、十一社）入選1作品、佳作十作品を選考しました。

二、愛知県環境保全関係功労者表彰候補者の選考

正会員及び理事会からの推薦各一名を愛知県あてに毎年度推薦しています。

本年度も各事業所に推薦依頼をお願いし、推薦のあった正会員について、推薦基準を満たしているか審査し、一名を選考しました。

理事等からの推薦は、推薦基準を満足する一名の理事を選考しました。

『地球温暖化防止に係わる喚起標語』に多数の応募を頂きありがとうございます。

企画委員会

委員長 鬼頭 富雄

「ISO/IEC17025を学ぶ」の講座を企画委員会の事業として、五月十六日の総会でJCLLAの平賀要一

氏を招いての経営者層を対象とした総論に始まり、技術者

管理者を中心とした二十一名の受講参加者により、講座を開催しました。

第一回：「管理上の要求事項」

（財）東海技術センター 阪野二郎氏（八月七日）

第二回：「技術的要求事項」

（株）ユニケミー 服部寛和氏（十月九日）

第三回：「不確かさ」

（株）環境科学研究所 牧原大氏（十二月三日）

全講座とも大変有意義なものであったと受講者よりのアンケート結果に評価されました。

次年度は第一回から第三回までのアンケート結果を詳細に分析し、更に精錬された講座といたします。会員各位におかれましては今年度同様、多数の受講申し込みがありますことを期待致します。

教育・研修委員会

委員長 河野 洋一郎

一月二十二日には中京大学文化市民会館で「平成二十年度SOP研修会」を開催しました。

参加者は三十一名で（株）ユニケミー技術部調査役の柳澤雅明博士を講師に迎え講義が進められました。

先回までのアンケートでは時間が短い点が指摘されておりましたので、今回は午前からの研修と致しました。従って、座学、作成演習、作成SOPのグループ発表、質疑応答の各講義も余裕を持って行えたことと思います。

また、今年度のアンケート内容は次回開催の参考とさせて頂きより実りのある研修会を目指します。

二月九日には教育研修委員会を開催し、平成二十一年度の活動内容について審議し、研修会としては平成二十年度と同じく新任者研修会、初級統計研修会、中堅実務者研修会、環境計量士等研修会、SOP研修会の開催を予定しております。

多くの方のご参加をお願い申し上げます。

広報委員会

委員長 西脇 光正

二月四日に委員会を開催し、広報誌第九九号の掲載記事について協議しました。

広報誌第九八号（一月号）に掲載した「お年玉クイズ」

の当選者を決めるとともに、模範解答をホームページに掲載することとしました。

また参加者からのアンケート結果では、今回の共同実験に約80%の参加者に満足してもらえたようですし、貴重な意見もいただいておりますので、次回の共同実験の際には今回以上に満足してもらえような内容にしていきたいと考えております。

委員長 長尾 隆宏

水質・土壌ワーキング

JIS K 0102の改正に伴い愛環協規定集の見直しを行っていますが、年度内に終了できる目途が立ってききました。順次改訂作業を行うように努めます。

大気・悪臭ワーキング

三月十七日に中京大学文化市民文化会館においてZボイラで有名な三浦工業株の協力を得て、ボイラの基礎知識及び水処理装置等及びPCB油分析及びダイオキシシン分析等の勉強会を行いました。

騒音・振動ワーキング

第二回共同実験は、実際に特定工場騒音を測定できたことで過去最高の参加機関の動員をすることができました。結果は範囲が63dB～65dBで、ほとんど差がない結果となりました。

ホームページ委員会

委員長 金田 哲夫

委員会を二月十九日に開催し、また定期メンテナンスを一月二十一日に実施しました。

委員会では、各委員会委員長とのホームページ活用方法についての協議内容を基に各委員会のページについての検

対外交流委員会

委員長 鈴木 昭人

第三回委員会を二月九日に開催しました。議題内容は次のとおりです。

○海外調査企画：海外調査事業（愛環協2008タイ）の結果報告及び報告書内容の確認。

○他団体交流企画：海外調査企画へ注力するため、随時検討を進めることの確認。

○その他：次年度の委員会活動の課題の検討。また、海外からの研修受入の無いことの確認。

討を行いました。今後のスケジュールとして各委員会のページのたき台を順次作成する事になり、掲載内容が一番多い技術委員会のページを最初に手がけ、六月の委員会において技術委員会のページの概略をまとめ技術委員会との検討を実施する予定としました。

また今後の活動のために高性能のスクヤナーの購入を理事会に要望することとしました。

今後の活動において広報委員会との連携についての意見も出されました。

現在定期メンテナンスにおいてトップページの写真を随時変更しております。常に変化があることは新鮮でありホームページにおいては大切なことであると思います。会員の皆様からの応募写真を期待しております。連絡は事務局までよろしくお願いいたします。

ブロック会議報告

第一ブロック

ブロック長 宇野 孝

第二回の会議を一月十三日に十二社中十一社十三名が参加して行いました。

最初に下期の事業経過及び事務局連絡事項について報告を行い、次いで懸案事項である愛環協公益法人化に関する今までの検討結果概要、並びに愛環協が「一般社団法人」を選択する方向性に至った経緯について報告を行いました。法人化に関する第一ブロックの意見としては、最終決定を理事会に一任することで合意されました。

次に次期ブロック長の選出に移り、宇野が再任され引き続きブロック長を勤めさせていただきますことになりました。

最後に濱地会長から最近の話題を提供いただき、会議終了後は有志による恒例の懇親会を行いました。

第二ブロック

ブロック長 鎌田 務

第二回ブロック会議は一月二十一日に十二社十三名の参加で行いました。

第三回、四回の理事会での事業及び委員活動等について報告を行い、その中で特に「平成二十一年度計量関係功労者等知事表彰」及び愛環協2008タイ「タイ国環境事情視察」又公益法人制度改革に伴い、当協会としては、「一般社団法人」を選択する方向で

あることを資料等に基づき説明、意見を伺いました。

平成二十一、二十二年度ブロック選出役員について諮ったところ、引き続き鎌田が務めることにきまりました。

会議終了後、懇親会を開催し、十一名が参加し、多いに情報交換で盛り上がりました。

第三ブロック

ブロック長 佐野 教信

第二回ブロック会議を一月二十七日に十社中九社の参加で開催しました。会議の内容は左記のとおりです。

- ①理事会報告
- ・事業報告（ISO/IEC 17025講座、中堅実務者研修会、環境計量士研修会など）
- ・各委員会報告（喚起標語募集、計量関係者等の知事表彰の推薦（総務）、タイ研修報告（教育研修）など）
- ・新入会員の報告（日本金属工業株衣浦製造所）

②公益法人制度改革について 愛環協が一般社団法人とすることに對して意見を求めた。出席九名が全て異議なしでした。

③役員改選の件 理事の改選が予定されるこ

とから新しいブロック推薦理事を選ぶこととなり、全員一致で藤吉工業(株)柴田氏を推薦しました。

会議終了後、有志七名にて懇親会を行いました。

第四ブロック

ブロック長 鈴木 昭人

第二回ブロック会議を一月二十八日に十六社中十一社の参加で行いました。

会議の内容は、①平成二十一年度第三・四回理事会の報告、②公益法人制度改革を機会とした愛環協の方向性に関する概要説明及びアンケート、③海外調査事業「愛環協2008タイ」概要の報告、④次期第四ブロック長の選出、⑤各種情報交換、でした。

会議後は、情報交換を目的とした懇親会（七名参加）を行い、盛会のうちに、次回ブロック会議での再会を約して散会とさせて頂きました。

第五ブロック

ブロック長 山本 英治

第二回ブロック会議は岡崎市竜美丘会館で一月二十一日に開催しました。会員十八社中十六社と川村事務局長を含め十九名の参加になりました。新入会された日本金属工業株衣浦製造所の紹介後、時期ブ

ロック長として(株)イズミテックの大野様を満場一致で推薦することを決定いたしました。理事会報告の後、公益法人制度改革への対応は当協会として一般社団法人を選択することを説明し、後日各社より回答いただくこととしました。

(集計結果は賛成十七社、判断できない一社でした。)

その後、会員の自己紹介を行い、各社の状況を知ることができました。最後にレストランのお弁当で昼食会の後、閉会としました。

事務局からのお知らせ

第二十七回通常総会

平成二十一年五月十五日(金) プリンセスガーデンホテル

環境測定分析新任者研修会

平成二十一年六月二日(火) 中京大学文化市民会館

環境月間講演会

平成二十一年六月十五日(月) 名古屋国際会議場

初級統計研修会

平成二十一年七月十日(金) ウイルあいち

皆様の参加を宜しく願います。

◆◆◆ 趣味のコーナー ◆◆◆

スキューバダイビング

(株)環境科学研究所

営業課 小森 麻夕子

水中の世界に魅せられて、早、六年が過ぎました。最初の二、三年は、とにかくはまって毎週のように海に行っていました。あまりにも真っ黒に焼けていたので、職場の人にも休み明けにビックリされてしまいました。最近はかなりベースダウンしましたが、それでも、休みを頂いて沖縄や海外でのダイビングを楽しんでいます。

何故ダイビングのライセンスを取ったかという点、海が好きだったのと、時間に余裕ができたので何か趣味でも始めてみようという気軽な気持ちで切っ掛けです。



最初は器材を買うつもりもなかったし、こんなにはまると思っていまませんでした。

ライセンスを取りに行ったのは和歌山県のお海。最初に潜った海は、砂がヘドロ状だったためとても濁っていて、前を泳ぐインストラクターのフィンを追うのに必死でした。だから最初はそれほど楽しいとは思いませんでした。

でもせっかくライセンスをとったので、感覚を忘れないうちに続けて潜ろうと思いつくうちに福井県の越前海岸に行きました。この海が感動的な光景で、真っ白な砂地に砂紋が広がり、魚達が優雅に泳ぎまわり、海面からは日差しが差し込みキラキラしていて、別世界でした。

それから、あつという間にダイビングにはまりました。まずは器材を揃えてスーツもウエットスーツに、冬でも潜れるようにとドライスーツまで購入。水中カメラも揃えました。和歌山や三重県などの紀伊半島や北陸方面、伊豆半島など。近場で潜れる海はずいぶんあちこち行ったことに



なります。最初はダイビングショップのツアーを利用していましたが、友達が増え出すとみんなで一緒に行くことがまた楽しくて、毎週のように行っていました。沖縄へ一人旅で何度も行ったこともあり、また伊豆大島や高知県の柏島、奄美大島など、ダイビングをしてみたい場所までいろいろ行くようになりました。

国内では和歌山県の串本がお気に入りですが、沖縄の本島はもちろん、座間味島、石垣島、西表島、宮古島、阿嘉島なども好きです。沖縄の海は、日本とは思えない位のきれいに毎回感動します。海外はサイパン、パラオ、フィリピン、マレーシアに行きました。その中でも特に良かったのはパラオです。たくさん小さな無人島が点在してい

て、とても美しい自然に囲まれた素晴らしい海でした。海の色は濃い青で、マンタやサメ、ウミガメなどの大物がたくさん見られて、すごい迫力でした。

ダイビングをしていると、このようにいろいろな場所に行けるのもとても楽しいですが、何が一番おもしろいかという点、陸上では味わえない水中にいるときの何とも言えない感覚です。透明度のよい海では数十メートルも下が透けて見えるので、まるで空を飛んでいるような感覚になります。高所恐怖症の私にとっては時には怖く感じることもあります。また、天気の良い日に上を見上げると日差しが差し込んでキラキラしていて、何とも言えません。さらに白い砂地でぼーっとしているのは本当に気持ちよく癒されます。生き物もたくさん種類がいて、かわいいものから危険なもの、サメなどの大物まで様々です。お気に入りの生き物を自分で発見したときには、とても嬉しいですね。

よく怖い思いをしたことはないかと聞かれます。幸いなことに人喰いサメのような怖い生き物に会ったことはない



のですが周りに人がいなくなるとかなり焦ります。海での迷子は怖いですが、以前、海から船にさがろうとしたら船がずいぶん遠くにいて、船長もこちらに気付いてくれなくて漂流(?)しかけたことがあります。波が強かったから酔いするし、みんなで大声で船に助けを呼んでもなかなか気付いてもらえなかったときは、どうなるかと思いました。今はそれも貴重な思い出です。最近、リタイア後の趣味でダイビングを始める方も少なくありません。そんな方々が楽しそうに潜っているのを見るといいなあと思います。私の夢はおばあちゃんダイバーになること。だから、私がおばあちゃんになった頃でも、この美しい海が守られていることを心から願っています。

測定機関紹介

株式会社 イズミテック

環境技術部 分析課

高橋 哲哉

当社は昭和三十七年にポイラー薬品の製造・販売を主業務として初代社長鈴木薫により豊橋にて創業しました。当初数名でスタートした会社も、昭和四十年代の公害問題を背景に事業内容を転換し環境分析に取り組みようになりました。現在は約六十名の会社となり、計量証明事業を中心に、環境・衛生分野全般の分析屋としてサービスマ業務を行っています。現在も創業当時から

本、發送する事務Tで構成されています。分析課は一般分析を担当する分析1T、金属・品質分析を担当する分析2T、有機・微量分析を担当する分析3Tで構成されており、私は分析3Tのリーダーを担当しています。社内の業務体制は三年前に大きく変わりました。それまでは、水質、大気、作業環境などそれぞれ試料採取を行った者が分析から報告書作成までを一貫して行う法律別の組織だったのが、試料採取担当の課と分析担当の課という形で役割を分担する体制となりました。これには賛否両論ありましたが、旧来の体制ではムダが多く効率が悪いということ、現在の業務体制となりました。

業務体制としては、企画総務部、営業部、薬品部、環境技術部の4部門に分かれています。環境技術部は調査課と分析課で構成されており、調査課は排ガス、臭気、騒音・振動などの屋外での測定を行う調査1T（チーム）、作業環境、空気環境、シックハウ

私の入社当時（十四年前）は、朝からお客様のもとへ試料採取に伺い、帰社してからGC、ICなどの分析をして、報告書作成までを行う毎日でした。以前の良いところは、担当の方と直接お話ができ、採取現場を自らの目で確認しているため、どのような結果になるかを予測する事もでき、分析を他の人に頼む手間もあ

りませんでした。しかし分析装置は複数の社員が使うため、待ち時間が多く、測定条件も使う人によって異なり、小さなミスやトラブルなども発生していました。新業務体制になったことにより、業務の生産性や分析の信頼性という面では、大きく前進する事ができ、各分野でスペシャリストの育成も順調に進みました。反面、役割範囲が狭くなったため、技術者として視野を広げる事や、情報の共有化、若手技術者の育成が今後の課題だと感じています。

当社がある豊橋市は、渥美半島の根元にあり、五三〇（ゴミゼロ）運動発祥の地でもあります。周辺は、大変自然豊かで、少し足を伸ばすと海や山のレジャーを楽しむ事ができます。社内には、恵まれた自然と遊ぶ社員が多くおり、夏は海でバーベキューやウエイクボード、サーフィン、冬には、若者を中心としてスキー・スノーボード、又一年を通してトレッキングやゴルフ、テニスを楽しんでいる集まりもあります。現在は入社当時と比べると社員も増えてアットホームな雰囲気は少し薄れてしまいましたが、部門や年代を超えて親睦を深めるために食事

でも企画・実施しています。世界的な不景気の中、明るい話題の乏しい今日ですが、当社は当社の長所を活かし、地域に根ざした信頼される分析屋を目指していきたいと考えています。そして、私自身も技術者として地域の環境保全に貢献できるよう、仲間と共にスキルアップしていきたいと思っています。

百年に一度と云われる世界同時不況の影響は、少なからず環境計量の分野にも及んできています。特に自動車関連産業の厳しい経営状況は、会員事業所にとっても大きな痛手となっているようです。早く「元氣な愛知」に戻ってほしいものなのです。

編集後記

明るいニュースの少ない中、唯一日本中を沸かせたのは、WBC（ワールドベースボールクラシック）で日本チームが世界一になったことでしょうか。（ちょうど優勝の瞬間は本協会の通常総会の真ん中ででした）



平成20年度社員旅行信州にて

さて、本協会では、濱地会長以下新役員が決まり、新年度がスタートしました。広報委員会も新メンバーで活動を開始しており、広報誌「あいかんきょう」では、「趣味のコーナー」「測定機関紹介」をシリーズで掲載しています。皆様からの投稿をお待ちしておりますので、ぜひ広報委員会までご一報下さい。

また、明るいニュース、元氣の出るような記事、何でも結構です。内容は問いませんが、ご投稿をお願いいたします。

発行人 (社)愛知県環境測定分析協会
会長 濱地 光男
〒460-0022
名古屋市中区金山1-2-4
アイディエリア405号
TEL・FAX 052-321-3803
E-mail aikankyo@nifty.com
編集 (社)愛知県環境測定分析協会
広報委員会